

13  
3152  
8





特  
3152  
8

久元元年五月吉

浅草車屋

九月

如外の併傳を之八

第十四條

二人の大將軍軍兵を後ぞおと白山の麓にあり

毎に春院法作兵報のの浅草



神宗月十日をかりありなる山のありとまらゆるまはありめづりのわれ林乃  
木の葉のころぬく降る。若の八十隈ハいこむ。是のゆ千峰ハるるく  
後之。秋嵐さむく吹おろひよ。楮ハ植くるをぞむ。松ハたれ之。猪をひ。神ねは  
く。坐後を踏くるつおはけハ。大将橋宗良麻呂とよのありたまふに。和宗  
まおカもおれぐく。りこ。ま。飯よ。是の死るがみ。横の。停をいこひ。は。か  
と。も。か。よ。え。お。れ。せ。ハ。軍。兵。又。百。人。あ。ま。り。に。よ。さ。る。勢。を。も。へ。ん。ん。大。宗。の  
ま。ひ。の。つ。統。の。雲。の。海。を。む。ら。う。と。め。く。お。と。た。ま。あ。り。あ。ま。つ。と。あ。り









大明大并專 卷之八 三



大明大并專 卷之八 三





















如斯の傳傳者之九

第十七條

守大付宿禰家持釋法白の御孫。并に如斯の事  
ち力家持の飯よ奉承

春虎は作の教よまかせく。信實の教よ奉承の御孫。飯よかうくおひめがひ。  
あやし人のありさまあがりたる。何れもわれ誓ひつるむねの遠下と誓ひ。飯よ  
とまきりひは<sup>おひめ</sup>。守大付宿禰家持<sup>まじり</sup>。大目春三守<sup>さくらん</sup>。半島信実<sup>のり</sup>。奉承<sup>のり</sup>。御孫<sup>のり</sup>。のてお  
よ奉承<sup>のり</sup>に。守大付宿禰家持<sup>まじり</sup>お孫<sup>のり</sup>にむかひて告ぐ。曰く。ふなれ志<sup>のり</sup>のむね  
あつ。白山の春虎はこれお子の御孫の御孫なり。が。奉承<sup>のり</sup>。御孫<sup>のり</sup>。退く。白山よこも  
るといふも。天下の民のたれよ。八世行はまるとむねわれど。せめ死神と八天下の  
奉承<sup>のり</sup>に。おひめが。とまきりひ。それくの御孫よ。おひめが。おひめが。おひめが。

月ノ事 卷之八

ユカリナク

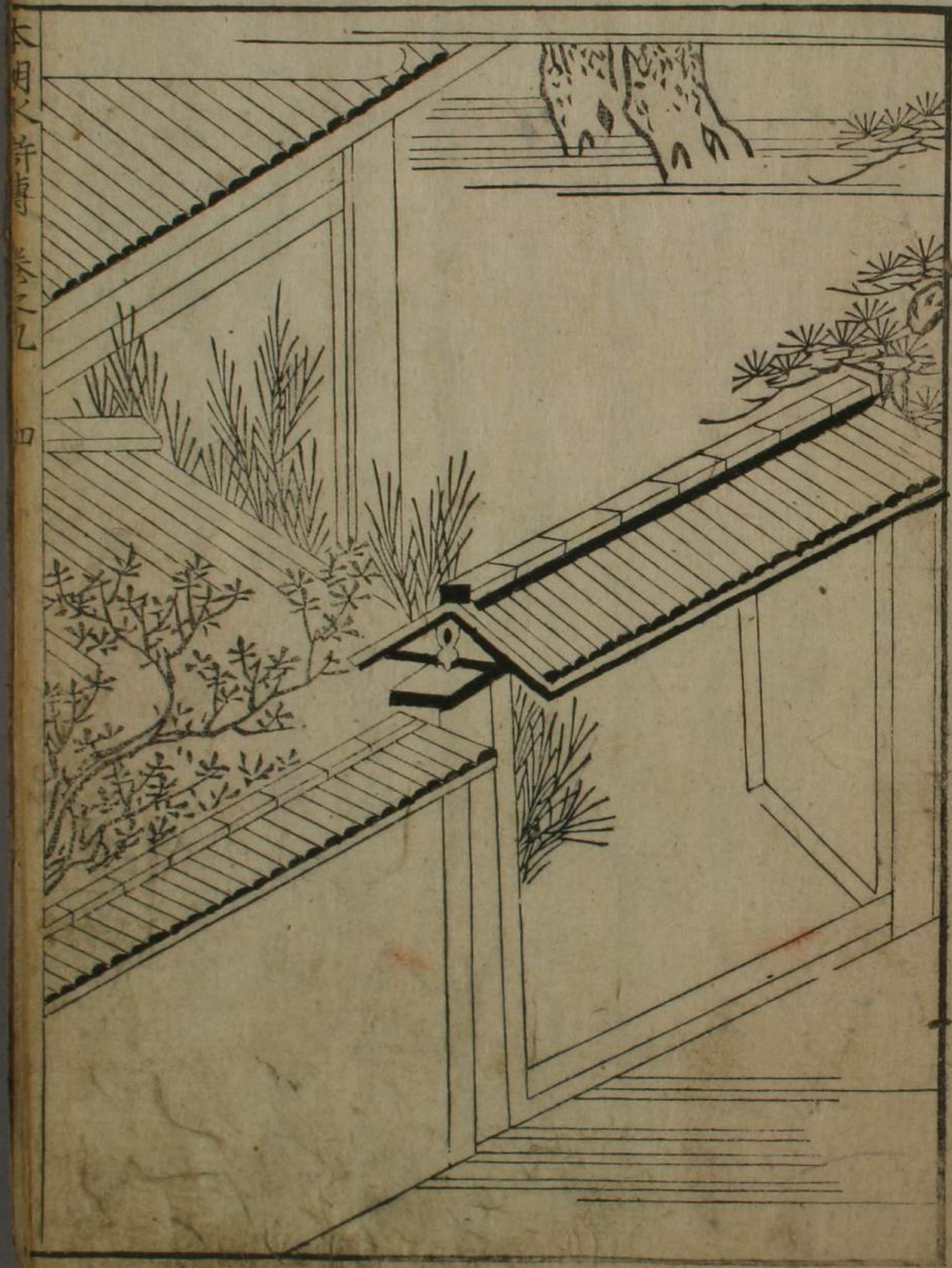












大相公許傳卷之九



大相公許傳卷之九



























わがあつて新しうるや。故に身悔ひてや。祖まつくにばねをさした  
まひ。まづあぢのあまひとゆかたまひ。お前のをまてのひきこえ。後  
麻呂書子。希に金麻呂のちになつて。お湯きみの所をさみせや。こせ  
たまふ。或は新元身金石大ち力のまへ。尾法三の遠の證の甲安修夏  
のまうにさむらせて。人の志を合せたまふとく。その月十まう七。若くは  
らく。少海ごらぬ。さてもを新し真山よ。むらひ人の娘のまう。さ。今  
かく故人のまう。さむらひませらに。祖まもうち。まぎびておがりけ。

本朝の辭傳卷之九終

本朝を月名の人々余程

大馬鹿

まか

麻布永坂町

新及



